

「鉄の暴風」より集団自決記述部分を抜粋

一、集團自決

—

設営隊の球一六七〇部隊（約一個大隊、兵員一千名）が引揚げてから、慶良間列島の渡嘉敷島には、陸士出身の若い赤松大尉を隊長とする、海上特攻隊百二十名と、整備兵百二十名、島内の青壮年で組織された防衛隊員七十名、設営隊轉進後配備された朝鮮人軍夫約二千名、それに通信隊員若干名が駐屯していた。この劣勢な戦力に、男女青年團、婦人会、翼賛壮年團員などが参加した。三月二十五日、未明、阿波連岬、渡嘉敷の西海岸、座間味島方面に、はじめて艦砲がうち込まれ同日、慶良間列島の阿嘉島に、米軍が上陸した。これが沖縄戦における最初の上陸であった。

渡嘉敷島の入江や谷深くに舟艇をかくして、待機していた日本軍の船舶特攻隊は急遽出撃準備をした。米軍の斥候らしいものが、トカシク山と、阿波連山に、みとめられた日の朝まだき、艦砲の音をきくと、午後四時、防衛隊員協力の下に、渡嘉敷から五十隻、阿波連から三十隻の舟艇がおろされた。それにエンジンを取りつけ、大型爆弾を二発宛抱えた人間魚雷の特攻隊員が一入つつ乗り込んだ。

赤松隊長もこの特攻隊を指揮して、米艦に突入することになっていた。ところが、隊長は陣地の壕深く潜んで動こうとしなかった。出撃時間は、刻々に経過していく。赤松の陣地に連絡兵がさし向けられたが、彼は、「もう遅い、かえつて企図が暴露するばかりだ。」という理由で出撃中止を命じた。舟艇は彼の命令で爆破された。明らかにこの「行きて帰らざる」、決死行を拒否したのである。特攻隊員たちは出撃の機会を失い、切歯扼腕したが、中には、ひそかに出撃の希望をつなごうとして舟艇を残したのもいた。それも夜明けと共に空襲されて全滅し、完全に彼らは本来の任務をとかれてしまった。翌二十六日の午前六時頃、米軍の一部が渡嘉敷島の阿波連、トカシク、渡嘉敷の各海岸に上陸した。住民はいち早く各部落の待避壕に避難し、守備軍は、渡嘉敷島の西北端、恩納河原附近の西山A高地に移動したが、移動完了とともに赤松大尉は、島の駐在巡查を通じて、部落民に対し「住民は捕虜になる怖れがある。軍が保護してやるから、すぐ西山A高地の軍陣地に避難集結せよ。」と、命令を發した。さらに、住民に対する赤松大尉の傳言として「米軍が来たら、軍民ともに戦つて玉砕しよう。」といったことも駐在巡查から伝えられた。

軍が避難しろという、西山△高地の一带、恩納河原附近は、いざという時に最も安全だと折紙をつけられた要害の地で、住民もそれを知っていた。

住民は喜んで軍の指示にしたがい、その日の夕刻までに、大半は避難を終え軍陣地附近に集結した。ところが赤松大尉は、軍の壕入口に立ちほだかつて「住民はこの壕に入るべからず。」と厳しく、身を構え、住民達を睨みつけていた。あつげにとられた住民達は、すこくと高地の麓の恩納河原に下り、思い／＼に、自然の洞窟を利用したり、山蔭や、谷底の深みや、岩石の硬い谷川の附近に、竹を剪つて仮小屋をつくつた。

その翌日、再び、赤松大尉から、以外な命令が出された。「住民は、速やかに、軍陣地附近を去り、渡嘉敷に非難しろ。」と言い出したのである。渡嘉敷には既に米軍が上陸している。それに二十八日には、米軍上陸地点においては、迫撃砲による物凄い集中射撃が行われていた。渡嘉敷方面は、迫撃砲の射撃があつて危険地帯であるとの理由で、村の代表者たちは、恩納河原に踏みとどまることを極力主張した。

同じ日に、恩納河原に避難中の住民に対して、思い掛けぬ自決命令が赤松からもたらされた。「事、ここに至つては、全島民、皇国の万歳と、日本の必勝を祈つて、自決せよ。軍は最後の一兵まで戦い、米軍に出血を強いてから、全員玉砕する。」といつのである。

この悲壮な、自決命令が赤松から伝えられたのは、米軍が沖縄列島海域に侵攻してから、わずかに五日目だった。米軍の迫撃砲による攻撃は西山△高地の日本軍陣地に迫り、恩納河原の住民区も脅威下にさらされそうになった。いよくあらゆる客観状況が、のつびきならぬものとなつた。迫撃砲が吠えだした。最後まで戦うと言つた、日本軍の陣地からは、一発の應射もなく、安全な地下壕から、谷底に追いやられた住民の、危険は刻々と迫つてきた。住民たちは死場所を選んで、各親族同志が一塊り／＼になつて、集まつた。手榴弾を手にした族長や、家長が「みんな、笑つて死のう。」と悲壮な声を絞つて叫んだ。一発の手榴弾の周囲に、二、三十人が集まつた。

住民には自決用として、三十二発の手榴弾が渡されていたが、更にこのときのために、二十発増加された。

手榴弾は、あちこちで発火した。轟然たる無気味な響音は、次々と谷間に、こたました。瞬時にして、――男、女、老人、子供、嬰兒、――の肉四散し、阿修羅の如き、阿鼻叫喚の光景が、くりひろげられた。死にそくなつた者は、互いに棍棒で、うち合つたり、剃刀で、自らの頸部を切つたり、鋏で、親しいもの、頭を、叩き割つたりして、世にも恐しい光景が、あつちの集團でも、こつちの集團でも、同時に起り、恩納河原の谷川の水は、ために血にそまつてしまつた。

古波蔵村長も一家親族を率いて、最後の場にのぞんだ。手榴弾の栓を抜いたがどうしても発火しなかつた、彼は自決を、思いとどまつた。そのうち米軍の迫撃砲弾が飛んできて、生き残つたものは混乱状態にお

ち入り、自決を決意していた人たちの間に、統制が失われてしまった。そのとき死んだのが二百二十九人、そのほかに迫撃砲を喰った戦死者が三十二人であった。手榴弾の不発で、死をまぬかれたのが、渡嘉敷部落が百二十六人、阿波連部落が二百三人、前島部落民が七人であった。

この恨みの地、恩納河原を、今でも島の人たちは玉碎場と称している。かつて可愛い鹿たちが島の幽邃な森をぬけて、おどくとした目つきで、水を呑みに降り、或は軽快に駆け廻ったこの辺り、恩納河原の谷間は、かくして血にそめられ、住民にとつては、永遠に忘れることのできない恨みの地となつたのである。

恩納河原の自決のとき、島の駐在巡查も一緒だったが、彼は、「自分は住民の最後を見て、軍に報告してから死ぬ。」といつて遂に自決しなかつた。日本軍が降伏してから解つたことだが、彼らが西山A高地に陣地を移した翌日二十七日、地下壕内において将校会議を開いたがそのとき、赤松大尉は「持久戦は必至である、軍としては最後の一兵まで戦いたい、まず非戦闘員をいさぎよく自決させ、われわれ軍人は島に残つた凡ゆる食糧を確保して、持久態勢をととのえ、上陸軍と一戦を交えねばならぬ。事態はこの島に住むすべての人間に死を要求している。」といふことを主張した。これを聞いた副官の知念少尉(沖縄出身)は悲憤のあまり、慟哭し、軍籍にある身を痛嘆した。

恩納河原の集團自決で志を得なかつた、渡嘉敷村長は、途方に暮れてしまつたが、軍陣地に行つた。村民も知らずくのうちに、また軍陣地の近くに蟻集していた。赤松は村民の騒々しい声を耳にして再び壕から姿を現わし、「ここは軍陣地だ。村民が集まるころではない、陣地が暴露するぞ。」と荒々しくどなりつけた。しかたなく住民は、日本軍陣地をはなれて谷底に降り、三日間飲まず喰わずでさ迷つた。乾パンや生米を噛り、赤子には生米を噛んで、その汁を与えたりした。水だけ飲むこともあつた。張りつめていた気力が、急に体から抜け、山峡の道を歩む足はふらくと浮いていた。迷ひ歩いた揚句、住民はふたゝびもとの恩納河原に集結した。無意識のうちにみんなの足が其処に向いて行つた。あの忌むしい自決の場所、しかしそこには食糧がいくら残つていることを誰も知つていなかった。村民はそこで一應解散した。その頃列島海峡には、飛行艇約百五十隻が常駐、駆逐艦二隻、艦載機二〇機ばかりを搭載した小型空母一隻が周辺に屯していた。巡洋艦は時々、夕刻にやつてきて食糧を補給したりして、直ぐどこかへ引返した。輸送船は絶えず海峡に出入していた。とにかく大小の艦船総数約一三〇隻が、慶良間海峡には常時碇泊していた。艦隊は、昼間は海峡に碇泊して戦闘準備をしたり、本島攻撃に出たりするが、夜間は日本の特攻・機を避けて、大型艦船はどこかへ忽然と消えて行つた。昼間、海峡の艦船からはレコード音楽が拡声機を通してはつきりと流れてくる。小高い所からは通信兵の手旗信号が望められる位の近距離にあつた。細長い沖繩本島の遥るか残波岬から、喜屋武岬に至る対岸は、舷を列ねた鉄の浮城に圍繞されて。そして本島攻撃の艦砲の音は数秒おきに轟いて、この小さい島を揺るがせていた。四月一日頃、渡嘉敷島に上陸していた一部米軍は一應撤退し、それからは毎日、午後になると舟艇二、三隻でどこかの海岸に上陸し、島の様子を偵察しては即日引揚げるのだつた。

そのころから渡嘉敷島住民は漸く平穏を取りもどした。空襲もなかつた。艦砲弾も落ちなかつた。米軍からしばし放任されていたのである。しかし死にまさる住民の困苦は降伏の日までつゞいた。住民はいよ／＼飢餓線上を、さまざまわねばならなくなつたのである。

それに、米軍に占領さ弛た国頭の伊江島から、伊江島住民が二千余人、渡嘉敷島の東端の高地に、米軍艦によつて送られて来た。島の農作物は忽ちにして喰いつくされ、人々は野草や、海草や、貝類を、あさつて食へるようになった。その間赤松大尉からは独断的な命令が次々と出された。四月十五日、住民食糧の五〇%を、軍に供出せよという、食糧の強制徴発命令があり、違反者は銃殺に処すという罰則が傳えられた。

するようになつて来た。

住民の食糧の半分はかくして、防衛隊員や朝鮮人軍夫等により陣地に持ち運ばれた。

日本軍は食糧の徴発命令のほかに、家畜類の捕獲、屠殺を禁止、これも違反者は銃殺刑に処す、ということであつた。

ある日のこと、既に捕虜になつていた伊江島住民の中から、若い女五人に、男一人が米軍から選ばれて、赤松の陣地に降伏勧告状を持つていくことになつた。彼らは渡嘉敷村民とは隔絶されていた／＼島の内情がわからない。それで白昼堂々と白旗をかくげて、海岸つたいに赤松の陣地に向つた。彼れらは日本軍陣地につくと直に捕縛されて各自一つずつ穴を掘ることを命ぜられた。それがすむと、後手にしばられて、穴を前にして端坐させられた。赤松は彼らの処刑を命じて、自らは壕の中に入つてしまつた。日本刀を抜きふつた拂つた二人の下士官が「言いの「す」ことはないか。」と聞いた。彼らは力なく／＼首を横に振つた。三人の女が、歌を、うたわせてくれと言つた。「よし、歌え。」と言いおわらぬうちに女たちは莊重な「海ゆかば。」の曲をうたつた。この若い男女六名は遂に帰らなかつた。

それから渡嘉敷島の住民で、十五、六歳の少年二人が日本軍によつて銃殺された。二人の少年は恩納河原の玉砕のときに、負傷し、人事不省に陥つたが、のちに意識を取りもどして、彷徨しているうちに、米軍にとらわれ、降伏勧告のために赤松の陣地にやられたのが、運のつきであつた。彼らは、白決の場所から逃げ出したという理由と、米軍に投降し、米軍に意を通じたという理由で、処刑されたのである。

その他防衛隊員七名が命令違反のかどで斬られ、また島尻郡豊見城村出身の渡嘉敷国民学校訓導大城徳安は注意人物といふので、陣地にひつぱられて、斬首された。

日本軍の将校をのぞいては、島におるものは、兵も、民も、やせさらばえて、全神経を食物に集中

老人たちは、栄養失調で／＼にたおれた。また食糧をあさつて山野をさまよつているうちに、日本軍の斬込みに備えて、米軍が、山中の所々に、布設した地雷に、ふれて死ぬものも少からずいた。その間、舟艇を爆破されて、特攻出撃の機会を失つていた決死隊の少尉達は、赤松隊長と離れて／＼航行行動をとり、五、六名宛の決死隊を組んで独断で、とき／＼上陸してくる、米軍の監視兵のと／＼に、斬込みに行つたりして、地雷にふれ、迫撃砲の餌食となつて相繼いで戦死した。

こんな状態が七月までつづいた。住民の食生活はいよ／＼苦しくなつた。じり／＼と死の深淵に追いやられていくのを、坐視するに忍びず、遂に島の有志たちは集團投降の決意を固めて、十三日には七十人ばかりの住民が投降した。

それから渡嘉敷村長が米軍の指示に従い村民を壕かも誘い出して、どし／＼投降させた。

七月十五日、米軍機から日本軍陣地の上空にビラが撒布された。それにはポツダム宣言の要旨が述べられ（降伏は、矢盡き、刀折れたるものゝ取るべき賢明な途だ、という意味のことが書かれてあつた。十七日には、防衛隊員が全部米軍に降伏し、十九日に到つて初めて、日本軍は山の陣地を降りた。知念少尉が軍使として先頭に立ち、次いで赤松大尉以下が武装して米軍指定の場所に向つた。彼は蒼白な顔をしていたが態度はあくまで鷹揚だつた。

渡嘉敷国民学校跡で、渡嘉敷島の日本軍と、米軍との、降伏に関する最後の会談がなされた。その会談には、民間側からは只一人、国民学校の字久校長が参席した。会談中、赤松大尉は、通訳のもどかしさを叱りつけたりした。会談は終つた。日本軍の部隊降伏と武装解除ということになつた。降伏式は、紳士的な方法で行われた。一人々々が武器を差し出して米軍に渡した。

かくして、本島作戦と切離されていた渡嘉敷島戦線は、独特の様相と、経過を示しつつ、沖縄島の降伏におくれること一ヶ月近くの、七月十九日に終幕した。

二

渡嘉敷島と共に座間味島は慶良間列島戦域における、沖縄戦最初の米軍上陸地である。

座間味島駐屯の将兵は約一千人余、一九四四年・九月二十日に来島したもので、その中には、十二隻の舟艇を有する百名近くの爆雷特幹隊がいて、隊長は梅沢少佐、守備隊長は東京出身の小沢少佐だつた。海上特攻用の舟艇は、座間味島に十二隻、阿嘉島に七、八隻あつたが、いずれも遂に出撃しなかつた。その他に、島の青壮年百名ばかりが防衛隊として守備にあたつていた。米軍上陸の前日、軍は忠魂碑前の広場に住民をあつめ、玉砕を命じた。しかし、住民が広場に集まつてきた、ちよ／＼と、その時、附近に艦砲弾が落ちたので、みな退散してしまつたが、村長初め役場吏員、学校教員の一部やその家族は、ほとんど各自の壕で手榴弾を抱いて白決した。その数五十二名である。

この自決のほか、砲弾の犠牲になったり、スパイの嫌疑をかけられ日本兵に殺されたりしたものを合せて、座間味島の犠牲者は約二百名である。日本軍は、米兵が上陸した頃、二、三カ所で歩哨戦を演じたことばあつたが、最後まで山中の陣地にこもり、遂に全員投降、隊長梅沢少佐のごときは、のちに朝鮮入慰安婦らしきもの二人と不明死を遂げたことが判明した。

出典

「鉄の暴風」

編著者 沖繩タイムス

発行所 朝日新聞社

一九五〇年(昭和二十五年)八月十五日発行